

115 學年度第一學期 Eurasia 基金會(from Asia)國際講座
第九期「亞洲共同體：東亞學的構築與變容」系列講次(06)
講題：台湾と日本の絆：臺日友好情誼的現況及展望

張淑玲
(2026.10.22)

摘要

本次邀請外交部亞太司張淑玲總領事蒞校演講，以「台湾と日本の絆：臺日友好情誼的現況及展望」為題，分享長年對日外交工作的實務經驗，剖析臺日關係在外交、經貿、科技及地方交流等領域的發展。演講由前文化大學校長、徐興慶講座教授主持，透過外交實務與國際局勢的深入分享，讓學生跳脫課堂所學，從不同的外交視角理解臺日關係及國際合作，拓展國際視野，並思考跨文化溝通、國際事務與產業發展對未來職涯的影響，為職涯規劃增添更多可能。

張淑玲曾任臺灣日本關係協會首任秘書長及駐橫濱辦事處處長，長期參與對日外交事務。她以日文「絆」（きずな）說明臺日之間深厚的情感連結。2011年東日本大震災後，臺灣各界踴躍捐輸協助日本；臺灣遭逢疫情及重大地震時，日本同樣伸出援手，展現雙方長年累積的信任與情誼。

在外交交流方面，張淑玲指出，1972年臺日斷交後，雙方雖維持非政府間的實務關係，仍透過交流機構、地方政府及民間團體建立多層次合作機制。近年日本更加重視臺海和平穩定，雙方國會議員、高層人士及地方政府往來日益密切，顯示臺日互動已逐步從民間情誼延伸至更多元的交流領域。

經貿與科技合作方面，2025年臺日雙邊貿易總額達848.5億美元，創下歷史新高。臺積電赴熊本設廠，成為雙方半導體產業合作的重要里程碑。展望未來，人工智慧、無人機、綠色能源及防災科技等領域，均具合作潛力。張淑玲強調，面對地緣政治變化與全球供應鏈重組，臺日應持續推動科技、產業及人才交流，並結合地方合作與青年參與，為雙方關係注入新的動能。

主持人徐興慶講座教授則從日本研究及臺日學術文化交流的角度指出，理解臺日關係不能只看外交政策與經貿數據，也應放在歷史文化交流及東亞區域發展的脈絡中思考。臺日之間既有複雜的歷史記憶，也累積了長期的文化理解與民間信任，今日能在民主價值、科技產業及地方交流等領域推動合作，是不同世代共同努力的成果。

徐興慶進一步表示，外交為國際合作建立制度與橋梁，學術文化交流則有助

於深化彼此理解與信任。在人工智慧快速發展、國際局勢持續變動的時代，大學教育除了語言學習，更應培養學生的歷史視野、跨文化理解及國際參與能力，讓青年成為連結臺日、面向東亞與世界的重要力量。

張淑玲最後強調，臺日之間的「絆」不只是歷史情誼的延續，更是面向未來的共同責任。透過政府、產業、地方社會與年輕世代共同參與，雙方可望在既有友好基礎上拓展合作領域，持續開創臺日交流的新局面。

徐興慶 整理

2026.10.27

115 學年度第一學期 Eurasia 基金會(from Asia)國際講座
第九期「亞洲共同體：東亞學的構築與變容」系列講次(06)
講題：台灣と日本の絆—台日友好關係の現状と展望

張淑玲
(2026. 10. 22)

要旨

今回は、台湾外交部アジア太平洋司の張淑玲総領事を招き、「台湾と日本の絆—日台友好關係の現状と展望—」と題する講演会を開催した。張総領事は、長年にわたる対日外交の実務経験を踏まえ、外交、経済・貿易、科学技術、地方交流など、多岐にわたる分野における日台關係の發展について論じた。講演会では、中国文化大学前学長の徐興慶講座教授が司会を務めた。外交の現場で培われた経験や国際情勢に関する具体的な解説を通じて、学生たちは教室での学びにとどまらず、外交という新たな視点から日台關係と国際協力への理解を深めた。また、国際的な視野を広げるとともに、異文化コミュニケーション、国際情勢、産業發展が将来のキャリアに及ぼす影響について考える機会となり、進路選択の可能性を広げる契機となった。

張淑玲総領事は、台湾日本關係協會の初代秘書長や台北駐日經濟文化代表処横浜分処の処長を歴任し、長年にわたり対日外交に携わってきた。講演では、日本語の「絆」という言葉を手がかりに、日台間に築かれてきた深い情緒的なつながりについて説明した。2011 年の東日本大震災では、台湾の各界から多くの義援金や支援物資が寄せられた。一方、台湾が COVID-19 の感染拡大や地震に見舞われた際には、日本も速やかに支援の手を差し伸べた。こうした相互支援は、長年にわたり積み重ねられてきた信頼と友情を象徴するものである。

外交交流について、張総領事は、1972 年の日台断交以降、双方は非政府間の実務關係を維持しながらも、交流機関、地方自治体、民間団体などを通じて、多層的な協力体制を構築してきたと説明した。近年、日本では台湾海峡の平和と安定に対する関心が一層高まり、双方の国会議員、政府高官、地方自治体による相互訪問や交流も活発化している。こうした動向は、日台關係が従来の民間交流を基盤としながら、より幅広い分野へと發展していることを示している。

経済・貿易および科学技術協力の面では、2025 年の日台間の貿易総額が 848 億 5,000 万米ドルに達し、過去最高を記録した。台湾積体電路製造

(TSMC)の熊本県への工場進出は、日台半導体産業協力における重要な節目となった。今後は、人工知能、ドローン、グリーンエネルギー、防災技術などの分野においても、さらなる協力の可能性が期待される。張総領事は、地政学的情勢の変化や世界的なサプライチェーンの再編に直面するなか、日台双方が科学技術、産業、人材交流を継続的に推進するとともに、地方間の連携や若い世代の参加を促し、両者の関係に新たな活力をもたらすことが重要であると強調した。

司会を務めた徐興慶講座教授は、日本研究および日台間の学術・文化交流の観点から、日台関係を理解するためには、外交政策や経済・貿易の統計だけでなく、歴史的な文化交流や東アジア地域の発展という文脈から捉える必要があると指摘した。日台間には複雑な歴史的記憶が存在する一方、長年にわたる文化的な相互理解と民間の信頼関係も蓄積されてきた。今日、民主主義という共通の価値観、科学技術産業、地方交流などの分野で協力が進められていることは、異なる世代の人々が積み重ねてきた努力の成果であると述べた。

徐教授はさらに、外交が国際協力のための制度的基盤と架け橋を築く一方、学術・文化交流は相互理解と信頼関係を一層深める役割を担っていると強調した。人工知能が急速に発展し、国際情勢が絶えず変化する現代において、大学教育には語学能力の習得に加え、歴史的視野、異文化理解力、国際社会への参画能力を育むことが求められる。こうした教育を通じて、若い世代が台湾と日本を結び、東アジアから世界へと視野を広げる重要な担い手となることへの期待を示した。

講演の結びに、張総領事は、日台間の「絆」は単なる歴史的な友情の継承にとどまらず、未来に向けて双方が担うべき共通の責任でもあると強調した。政府、産業界、地域社会、そして若い世代がともに交流に参加することで、これまで培われてきた友好関係を基盤に協力の領域をさらに拡大し、日台関係の新たな展望を切り開いていくことが期待される。

キーワード：日台関係、交流、絆、外交

中国語要旨・まとめ 徐興慶

日本語翻訳 徐興慶

2026.10.27